



童話  
まひろこ

草野浩一

著

とみいえひろこ

監



## 声

まるで童話はなされている今夜にはすてふね川の空気旅立つ

舐めたあとのひとさしゆびを翳すときあなたの受けた風がまつわる

嘘をつく相手をさがす日はつづく低くまでおりてきた雲の、ふと、嘆き

声のして草へふみいるつまさきにコツんと触れた真冬のトルソー



冬

もうひとつの世界をうつすみずかがみふれあうための雪が生まれて  
火が終わる「ju」の声をきく飲みながら飲みながらあれこれ、この町で  
くちびるのささくれひとつ噛むように捨ててしまえよ季節のために  
如月の息苦しさを知ってゆく感熱紙がもうまるまって午後  
かの冬の少女のまふたとじられてわたしに見えない空を透かした



## 遠雷

この川がいつもはじめに朝を知り最期まで夜とくちづけをする  
遠雷をひとりきいている紫のあやとり糸を樹に絡ませて

片目のひとと手をつなぐ轟音は背から被さりわたしをたたく  
網をうっ音のよう午後とつぜんの雨がわたしと川をつつんで  
重たさを黒くあたたかいのみものに切々と説く風のまちがい



## 鼠

目尻からこの世にとける非のころ二月カモメは灰喰う町へ

川からのまばたきの音にうなされて立ち上がれない鼠だったよ

どうしよう、とひとりゆうてみる夕べ紫の糸がふれて あ、風

背を突く草がおっている草は被さるものを空として突く

そして、と急くように言う幼さは真冬の空になじんで、そして

触れて捨てたみどりの尖り石よりか低いラの音うならせている血が

そつと、と教えてもらう撫でられるようにさみだれはじまっている

腹にふく風のおもたき誰しもがかなしみ抱え佇つ海がある

## 森へ

それぞれにさ迷う日暮れランプ屋の店主のゆびがあたりを灯す

刺す遊び兄としくたくて森へ行く土の冷たさ空の激しさ

鳥のむくろに鳥むれるたそがれを影ふみ鬼の声のあかるさ

耳までの遠さとおもう垂らしても垂らしてもこの糸は残照

剥がされてしようじきに言うための咽、へそ、骨を持つようになり

待っていた足音に似てひらく花 柩のなかをみたして欲しい

どのように見ているか見る男にはほくろの裏に星空がある

紫の翅が落ちていてああ、としゃがみ抱きとることを紡いでゆけば

晩年に恋にこいする男とてテトテトテントは大空テント

魚ねむるあなたのせなかせなかせなか踏み荒らされた紙の部屋にて

ぐわとひらけ薄い薄い色煮詰めてはひどい花びらばかりの日々を

つかまれた髪が鎖骨にはりついてからまっているせい胸が痛い寒い



## 疎水

水草の陰りそのまま運ばれる空中庭園にひとを待たせて

曆ごと抱くようなことひといきにそれを言ったら唇生きて

やさしさは母のまくらのひだまりの透きいくような肌の一枚

たまごそっと抱けば落ち着くさまざまな悪癖をもうやり尽くしたように

血のいろの葉を頁にはさむときかすかな風が眼を圧してくる

雨の夜は眠れぬ渚背負いつつあした迎える月経を思う

除光液かすか匂わせ眠りいるきみがこぼした春のくるしみ

待っているわたしの骨のうずまりの音だけ抜けてぬるい疎水に

花させば遠くうまれた声のして記憶は濡れるすてふね川の

菜の花をよく食べる春忘れないことは何もないわたしの岸边

## 月のあかり

その黄色まぶしいばかり畏れなく朝をひらきて夕とじる花

そして、というように風　そして、というようにわたしも夏も

白鳩のつばさの骨の透くような空をかかえて我は少年

もう、いいの。幼く届くでしょう朝に広がった荒れ野ごとを差し出す

春めいた傘はつきつきひらかれてアジアの果ては酸ふくむ雨

それはもうせいっぱいに細い月くちぐせを囁きなおしやり直すいとなみ


手のひらに月のあかりをかこみ了え綴りはじめるまるい童話の


雨を知るさくら音を知るさくらがあつてすみずみへ果てしないたまごは

雨の日の高架電車に見下ろせば浮力のままのさくらひろがる





草野浩一  Twitter @kusakagerou / mail:hkouichi61@gmail.com

とみいえひろこ  Twitter @hirokodori / note @hirokodori / mail:hirokodori@gmail.com